
雨降りの日曜日

エバンス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨降りの日曜日

【著者名】

エバンス

N6334F

【あらすじ】

雨降りの日曜日。僕と君と彼女の束の間の邂逅。この雨は僕を何処に運んでくれるのだろうか。

夢の中で、僕は子供になっている。

初め、その事は僕をひどく混乱させる。でも僕が子供である、という事実が、僕をだんだんと飲み込んでいく。まるで、ねばねばとした液体が体を包んでいくような気分だ。ゆっくりと、確実に、僕は子供になっていく。まだ言葉も話せないくらい小さな子供に。その事を何処かで喜んでいる自分がいる。

もう、話さなくて良いんだ。

もう、伝えなくて良いんだ。

もう、分かり合う必要なんてないんだ。

でも、そう考える自分も消え僕は完全に子供になる。

僕は劇場のようなところにいる。触ると、血が付きそうなほど赤い座席に座っている。辺りを見まわすと、僕と同じくらい小さな子供達が行儀良く座っている。幼稚園の遠足のような感じだけど、大人の姿は一人も見えない。僕以外の子供は何かを楽しみに待つているようだ。彼らの顔つきや、雰囲気からそれが分かる。僕も「何かを楽しみに待つ顔」をつくろうとしたが出来ない。僕は彼らを、うらやましくも、うらめしくも、思つ。僕は下を向き、自分の手ばかりを見つめている。

しばらくすると、暗かつた辺り一面がぼうつと明るくなる。ステージに照明が落ちたせいだ。顔をあげると、ステージ上に一人の男が立っている。男は何万年も前からの夜を集めて固めたような漆黒のスーツを着ている。人工的な明かりの中で、その暗闇が不自然に浮かび上がっている。男の顔は、仮面をつけていると思うほど、表情というものがない。あるいは、本当に仮面をついているかもしない。

男は何処からともなく、色とりどりのボールを取り出しジャグリングを始める。ボールは一定の軌道を描き男の手に吸い寄せられる。子供達は一瞬息を飲んだかと思うと、すぐに「すごい！」とか「うわー！」といった歓声、奇声をあげ始める。男はそんな声が聞こえてないよう見える。ただ黙々と自分の仕事を機械的にこなしているように思える。

子供達の歓声が大きくなるにつれて、逆に僕の心は深く沈んでいく。僕は耳を強く押さえる。

間違っている。

と僕は思う。何処が間違っているかは分からないうけど、男の行為は賞賛すべきものではないと思う。

どのくらい経つだろう。辺りは夜の森のように静かになってしまる。それは能動的な静けさだ。少しでも音のするようなものは一瞬で飲み込んでしまうような。

ステージの上で何かが光を放つ。
ナイフ。

男がナイフを持っている。ナイフが照明の光を受け、反射させる。男の漆黒のスーツにナイフの輝きが映える。

子供達は魅せられた様にナイフをじっと見つめている。何の音も発していない。もちろん僕も含めて。

男はステージの上からゆっくりと客席を見まわす。自分のナイフがもたらす静けさを確認している様に見える。

男は少し微笑んだかと思うと、ナイフをいきなり自分の胸に突き刺す。

ストン。

という軽い音が響く。血は流れない。まるで男の胸がナイフの納まるべき場所のように見える。

男が何処からかナイフを取り出し、今度は腕に突き刺す。サク。

痛そうな素振りはまったく見せない。嫌だけど仕事だから仕方な

くやつている。そんな感じだ。

僕達は男から田を離せない。

男は自分の体中にナイフを刺し続ける。

しばらく経つた後、僕はある変化に気が付く。

子供の数が明らかに減っている。最初は劇場の客席いつぱいにいたのに、今は半分すら埋まっている。男が自らを傷つける度に、子供が消えていく。いや、消えるというのは正確な表現じやない。色あせる。

そう、色あせるといつた方が良い。写真が長年をかけてそうなるようだ。

子供達は、まるで寿命をまつとうした老人のように、まるでそれが当然であるかのように、色あせ死んでいく。

僕は動くことが出来ない。この奇妙な風景をただ眺める事しか出来ない。僕はだんだん不安になつてくる。死ぬことじやない。

ちゃんと死ぬことが出来るかどうかだ。

ふと気付くと男が目の前に立っている。近くだと、男が仮面を付けている事がはつきりと分かる。仮面に彫られた、無機的な瞳と視線がぶつかる。

目が合つ? 僕は子供なのに?

違和感を覚え、自分の体に目を遣ると、僕は今の僕になつている。二十歳の本当の、現実の、僕に。

男がスツと手を伸ばし、僕の心臓にナイフを突き刺す。これ以上ない正確な位置なので、ズブっとナイフが心臓の膜を突き破る音が聞こえる。体から勢い良く血が流れ始める。劇場の赤い床が更に赤く染まる。男のスーツの漆黒が血の赤を吸収するよつに妖しく蠢く。体が軽くなる。ゆつくりと意識が遠ざかり始める。

なんだ、簡単じゃないか。僕は何を不安に思つていたのだろう。膝が折れ、自分の血の海に倒れる。血は暖かく気持ちいい。体が溶け、血と同じドロドロの液体になるような気がする。

僕の瞳はまだ仮面の男の顔を捉えている。仮面の男は悲しそうに

頷く。最愛の女性と別れる若き青年のよつよ。そして男はゆづく
と仮面を外す。そこにあるのは
僕の顔だった。

夢から覚めた時、僕は自分がどこにいるか分からなかつた。自分
がどの世界に属しているかが分からなかつたのだ。

僕はこの世界では何者なんだ。

小さな子供？

仮面の男？

どこからか雨の香りがした。それが僕を少し落ち着かせた。僕は
立ち上がり、大きく伸びをした。それだけで頭が幾分かすつきりし
た。

世界がゆづくと、本当にゆづくと、現実の姿を取り戻し始め
た。

少しくすんだ壁。

本棚に並ぶ色々な本。

好きなバンドのポスター。

見慣れた風景が、もと有るべき形に一つ一つはまつていった。

僕は洗面所に行き、顔を洗い、ひげを剃り、歯を洗い。簡単な服
に着替えた。それだけしてしまって、もうする事がなくなつてしま
つた。何の予定もない雨降りの日曜日。

僕はソファーに寝転び、せつせつと見ていた夢の事を思い出して
みた。でも思い出そうとするべく、まるで霞がかかつたみたいに、僕
の頭は働かなかつた。

たくさんの子供達。

仮面の男。

溢れ出る生暖かい血。

断片は静物画のように鮮やかなのに、全体のイメージといつもの
はまったくつかめなかつた。

僕は目を堅く閉じた。
思い出すんじゃない。

想像するんだ。

と強く自分に言い聞かせた。僕は自分が小さな子供で、劇場の真つ赤な座席に座っているところを想像した。少しづつ自分の中で「何か」が形を成し始めた。僕は無意識の内に、天井に向かって手を伸ばしていた。閉じ込められた囚人が、光を求めるように。でもどれだけ手を伸ばしても自分の中の「何か」には、届かなかった。

僕は手を下ろし、目を開け、苦笑した。

僕は何をやっているんだ。

雨降りの日曜日はほんの少し、人をおかしくさせるのかもしだい。

ソファーに腰掛け、何をしようかと考えていると、携帯電話が鳴った。でも僕には、その着信音が現実の空気を震わしていないように聞こえた。まるで僕の知らない世界を超えてきたように、その音は不自然だった。その不自然さで誰からの電話か、という事が分かった。

「もしもし。」と女性の声が言った。

「もしもし。」と僕。

「アミだよね。」

「正解。何で分かったの。」

「声だよ。アミの声で分かった。」

と僕は言ったが、それは少し違った。声そのものではなく、響き方だった。アミの声はまるで、直接会って言葉を交わしているようだった。

「今、何してたの？」

とアミ。アミの声は幼い子供のように、透明に響く。

「何もしてないよ。ボーッとしてただけさ。」

「楽しい？」

「何が？」

「ボーッとしてるのが。」

「別に楽しくないよ。予定がないだけで。」

「じゃあ、少しお話しない?」

「もちろん良いよ。」

それからアミとこつものように、昔話をした。アミは高校の時の同級生で一、二年生の丸一年間付き合っていた。時々電話が掛かってきて、懐かしい思い出を共有する。

「そうそう。それでの時何の映画を見たんだつけ?」とアミ。

「覚えてないな。確か恋愛映画だったような気がするけど。」

「そりゃあ覚えてないでしょ? だつてあなた寝てたんだもん。」

「そうだったかな。」

「そうよ。それは覚えてる。あの時は怒りを通りすぎて、私笑つちやつた。」

と語つて、まるでその時の様にアミは笑つた。空氣の振動がこちらに伝わるような気がした。

「思い出したよ。きみが帽子を無くして、大泣きした時の話だろ。」と僕。

アミの帽子は結局見つからなかつた。

「あれー。そうだったかなあー。忘れちやつた。」とわざとちりしく語つた。

そりやつて、とりとめの無い、でも僕達にとっては大切な、思い出話をしばらく続けた。

「ねえ、一つ聞いても良い?」とアミがあらためた声で語つた。

「なに?」

「黒野君はあの頃と、今と、何か変わったと思つ。」

アミは僕の事を「黒野君」と呼んでいた。あの頃のようにな前を呼ばれると、僕は自分の心が、懐かしさに震えるのを止めることが出来なかつた。

「僕自身がつて事?」

「そう。」

君はどうなんだ?って聞こうとしたけど、やめた。

アミは変わっていない。

それは僕にも、アミ自身にも分かっている事だった。

「さすがに彼女と『デート』の時は、寝たりはしなくなつたよ。」と

僕は言った。

「そんなんじやないの。」アミはあきれたといつよりは、悲しそうに言つた。

「もつと本質的なことよ。」

正直言つて僕はその時、質問とは全く別のことを考えていた。僕が考えていたのは、自分がどう変わったか、ということではなく、どう言えればアミを悲しませずに済むだろう?という事だった。いや、全然変わってないよ。

そうだなあ、ずいぶん変わったな。

どちらの答えをアミが求めているか僕には分からなかつた。

「変わった部分もあるし、そのままの部分も有ると思つ。」と僕は言つた。

「なんだかそれは一般論の様に聞こえるわね。」

「性格や考え方は変わつてないと思う。でもその表現の仕方は変わつたかもしない。」

「それってどういう事?」

「大人になつたつていう事さ。この考え方はこの人には合わない

だらうな、とか。これを言っちゃマズイ」とになるな、とか。そういう事が分かり始めたんだ。」

「ふーん。」とアミは言つた。アミは僕が言つた事について、何か考えているようだつた。思考の波が揺れているのを僕は感じた。

暫くの沈黙の後、電話は突然切れた。アミの電話はいつも突然切れた。多分、電話線の番人というのが居て、ストップウォッチで時間を持つていてるのだ。それで時間がくると背中の大きな斧で電話線を切るのだ。

プツン。

そんな切れ方だった。

電話が終わつてしまつと、周りの空気には奇妙な沈黙が満ちていった。ドロリとした、無音の液体に体が包まれてゐるような気がした。そこでは雨の音さえも、やけにくぐもつて聞こえた。

僕はさつきアミに言つた事について考えていた。

変わつた部分もあれば、そのままの部分もある。

それは全くの嘘ではなかつたが、僕の伝えたかつた事はもつと別のことだつた。僕が伝えたかつた事は

君が死んでから、僕の心は磨り減り続けてゐるんだ。

という事だつた。自分の感情や考え方を伝えないんじゃない。伝えられないのだ。何故か、伝える人がいないからだ。そうやつて僕の気持ちや、思考は死んでいくのだ。そう考へると僕は、たまらなく悲しくなつた。

アミ。

と僕は言つた。

どうして、君は僕をおいて死んでしまつたんだい？

もちろん、答えてくれる人なんて、誰一人いなかつた。答えを見つけ出せる人といえば、アミを愛していた僕くらいだつた。残された僕が見つけ出さないといけなかつた。

僕は首を振つた。少し感傷的に成り過ぎてゐるみたいだつた。

僕は、草薙さんに電話をかけ、今からお酒でも飲みませんかと誘つてみた。草薙さんは僕の通つてゐる大学のO.Bで、フリーのカメラマンをしていた。実家が相当のお金持ちで何の不自由も無く世界中を飛び回つてゐた。確か今は日本に帰つてきていたはずだ。

「お前から誘つてくるなんて珍しいな。驚いたぜ。」と草薙さんは言つた。日曜日の朝からお酒を飲むことに関しては何も言わなかつた。草薙さんはそういう人なのだ。

「いいぜ、俺も暇だつたからな。今から迎えに行つてやるよ。着替えて待つてな。」と言つて電話を切つた。

特にお酒を飲みたいという気分ではなかつたが、このまま家にいると、少しずつ自分が腐つていく気がした。それに、アミからまた電話がかかつてくるのが怖かつた。誰かと一緒にいれば、アミから電話がかかつてくることは無かつた。僕は、アミの死がもたらした変化について、まだ上手く説明することが出来なかつた。

僕は服を着替えて、草薙さんの迎えを待つた。心なしか、兩音が前より強くなつてゐるような気がした。

しばらくすると、アパートの部屋のチャイムが鳴つた。ドアを開けると、草薙さんが立つていた。髪の毛が少し濡れていたが、気にしていないうだつた。

「おう、久しぶりだな。」と草薙さんが言つた。

「そうですね、三ヶ月くらいですかね。」

「そうだな、あちこち回つてたからな。またその時の話をしてもよ、お前聞きたいならな。」

「ぜひ、お願ひします。」

「でも、どうしたんだ、急にお酒が飲みたいなんてお前らしくないぜ。」と言つて僕の顔を覗き込んだ。草薙さんの瞳は、黒い杭が一本打ち込んでいる様に、黒く確かだつた。まるでこれから自分が見るべき風景が、もうすでに映つているような気がした。

「別に、ただお酒を飲みたくなつただけですよ、草薙さんの話も聞きたかったし。」と僕は言つた。

「そうか、なら良いんだけどな。」と言つて笑つた。「駅前にある店で、地下にあるんだが、そこなら朝からお酒を飲んでも嫌な感じはしないぜ。どうだ？」

「何でも良いですよ、お酒を飲めれば、お任せします。」

「ますます、お前らしくないな。まさか、別人じゃないよな。」

「違いますよ。」と僕は言つた。少なくとも今は違つ。まだ僕は僕だ。

「なら、行こうぜ。なんか、俺も無性に酒を飲みたくなつてきち
まつた。」

僕は頷いて、外に出ようとしたが、いつも履いている靴が無いことに気付いた。

「どうかしたか。」と草薙さんがドアの外から言った。雨が彼を濡らしていた。

「靴が無いんですよ。昨日まではあったのに。」

「そんな事は後だつて良いだろ、今は酒だ。」

「そうですね。」と言つて、僕は靴箱から別の靴を取り出して履いた。突然靴が無くなることは彼にとつてはどうでも良いことなのだ。

「バイクで来たんだが、良いよな。」と言つて、ヘルメットをこちらに投げて寄越した。

アパートの前にバイクが止めてあつた。バイクについてはよく知らないが、それが相当高価な物だという事は分かった。

草薙さんがエンジンをつけると、ドツドツと唸り始めた。その姿は僕に洗練された肉食動物を思わせた。

バイクにまたがると、振動が体を通じて伝わってきた。

「飛ばすぜ。」草薙さんが格好つけて言つたが、それは本当に格好良かつた。雨までもが彼を飾るアクセサリーのように見えた。

バイクは面白いように加速していった。まだ太陽に触れていない朝の冷たい空気が肌に気持ち良かつた。細かな雨が、降り注ぐもの全ての色を鮮やかに映し変えていた。流れていく風景の中、葉の緑や、花の赤が、際立つた映像を僕の中に残していった。

信号に引っかかると、草薙さんは舌打ちをした。赤色の光が僕らを照らしていた。バイクの表面についた水滴が、赤色の光を受け、薄い血のように僕の目には映つた。その事が、僕を少し落ち着かない気分にさせた。

地下にあるバーに着いた時、僕達はずぶ濡れだつた。草薙さんは良いかもしれないが、雨は僕を飾つたりはしてくれない。ただ体温を奪つていくだけだ。店員さんからタオルをもらい、僕はビールを、草薙さんはジントニックを頼んだ。

簡単なつまみと一緒にお酒が運ばれてきて、乾杯をした。

「何に乾杯だ？」と草薙さんが言った。

「何の乾杯でもないですよ。お酒を飲むための、ただの通過儀礼です。」と僕は言った。

「なるほどな。」と言つて草薙さんは笑つた。

しばらく、黙つてお酒を飲んでいたが、突然草薙さんが

「ジャーナリストってなんだと思う？」と言つた。

「何ですか、いきなり。」

「良いから言えよ。おまえの意見が聞きたいんだ。」

「えーと、ちょっと待つてくださいよ。事実に対する現状や意義、展望を報道する専門家って何かに載つてましたね。」

「俺はお前の言葉で聞きたいんだ。」

「うーん、世界を自分なりの形に切り取つて、それを売る人達ですかね。」

「自分なりつて所が鋭いな。」

「そうですか。」

「ああ、決して中立的ではあり得ないからな。中国を批判する人はたくさんいるが、ノルウェーを批判する人はいるか？結局は好き嫌いの問題なのさ。」

「それに、僕達、大衆は気付いていない。」

「そういう事だな。」と言つと、草薙さんは美味そうにお酒を飲んだ。

「でも、ある意味ではそれも必要なんじゃないですか？」と僕は言った。

「それって何だ？」

「ジャーナリストの意見を信じることです。それも無条件に。」

「どういう事だ、という風に草薙さんはこちらにグラスを傾けた。」

「ええと、ジャーナリストが好きに情報を伝え、僕達が好きに情報を受け取る。そうすれば、自分の世界は平和ですよ。崩れること無い。」と僕は言った。

「まあ、それも一つの考え方だな。」と草薙さんが言った。一つの考え方、というのは彼が良く使う言葉だった。この言葉は別に相手の意見を認めているのではなく、でも俺には俺の考え方がある、という言葉が隠されているのだ。良くも悪くも、草薙さんは自分の考え方を持つている人だった。僕はそんな彼が少しうらやましかった。

「でもな。」と草薙さんが少し経つてから言った。

「お前の考え方を完成させるためには一つ条件がある。自分の世界を崩さないための条件がな。」

「何ですか？」

「孤独であること。周りに人がいれば、お前の世界は成り立たない。」

「まあ、そうですね。」と言つて僕はビールを飲んだ。ビールはそれほどおいしくなかつた。それほどビールが飲みたい訳でもなかつたのだ。

昼前になつて、二人組の女性が店に入つてきた。一人は、髪の短い少し太つた女性で、もう一人は、髪が長く影のようになつそりとした女性だった。一人ともきちんとした服装をしていて、昼からお酒を飲むタイプには見えなかつた。

彼女達は入り口近くのテーブルに座つた。太つた女性の方がこちらをちらちらと見ていると思ったら、僕達のテーブルにやつて来て

「草薙君でしょ。」と言つた。

僕は驚いて草薙さんを見た。草薙さんは、しばらく女性の顔を見ていたが、すぐに

「ああ。」と驚きとも、ため息ともつかない微妙な声を出し

「翔子か。」と言つた。

「正解。」と言つて彼女は微笑んだ。それはとても素敵な笑顔だつた。良く彼女の顔に馴染んでいて、これまで幾度も彼女がその笑顔を繰り返してきたことが分かつた。

「紹介するよ。翔子は俺の・・・・・・」

「元恋人よ。」と翔子さんは、草薙さんを遮つて言った。

草薙さんは苦笑して見せたが、それは僕に向けられたものではなく、翔子さんに向けられたものだった。翔子さんは悪戯っぽく笑っていた。

そんな二人の無言のやり取りを見ていると、この二人が本当に恋人同士だったという事が良く分かつた。草薙さんに恋人がいたとは少し驚きだつた。草薙さんにはガールフレンドはたくさんいるが、正式な恋人は見た事が無かつた。でも、翔子さんなら釣り合いが取れているような気がした。

でも一人のそんな親密な空気は、僕を居心地悪くさせた。その気持ちは、元恋人同士の再会に居合わせた時に感じる気まずいといった類のものではなかつた。この気持ちはもつと別の何かだつた。それは憧れに似た気持ちなのかもしだれない。一人の放つ雰囲気やエネルギーに嫉妬しているのかもしだれない。その雰囲気やエネルギーは一人ではなく、二人で、初めて生まれるものだつた。

草薙さんが何か言おうとしたが、先に翔子さんが

「そっちの方があありがたいわね。なら私の代わりにあの娘の相手してやつてくんない？」と言つて、もう一人の女性の方を指差した。彼女はお酒には手をつけず、下を向き文庫本を読んでいた。

「良いですよ。」と言つて僕は席を立ち、彼女の居るテーブルに向かつた。

僕が彼女の向かいの席に座ると、彼女は、どうかしたの？という風に首を傾げた。長い髪が静かに揺れ、彼女の顔にやわらかな影を遺した。

「君の友達、翔子さんていつたかな、が僕の先輩の元恋人だつたらしくてさ。僕は邪魔者になっちゃつたんだ。」と僕は言つた。

彼女はゆつくりと頷き、二人の居るテーブルの方を眺めた。

二人は熱心に何かを語り合つていた。まるで恋愛映画のワンシーンを見ているような気分 「席外した方が良いですかね。」と僕は言つた。

になつた。

「名前はなんていうの？」と僕は尋ねた。

「亜季。」と彼女は言つた。

彼女の声はとても不思議な響き方をした。まるで僕の見えない何かに濾し取られたように、小さく聞き取りづらかつた。

彼女はそれだけ言つと、再び手の中に収まつてある小さな文庫本に目を落とした。その文庫本は、良く着込まれた服のようにつれいに色あせ、彼女にぴつたりとはまつていた。

僕は目を閉じ、店に流れるジャズに耳を傾けた。

彼女の前では沈黙は氣詰まりなものではなかつた。むしろ不用意に言葉をこころがす必要がなく、気楽だつた。

まるで何かを確かめるように強く奏でられるピアノの音を聞いていふと、僕は久しぶりに安らかな気持ちになることが出来た。それが彼女の側に居ることから来るものなのか、それともジャズのおかげなのか、僕には分からなかつた。

僕は音楽に集中した。流れしていくメロディーを一つ一つ、自分の中に吸収していった。ピアノ、トランペット、サキソフォンの躍動的なリズムに隠された、奏者の表現イメージを掴もうとした。でもそれは簡単な事ではなかつた。手で触れそうになる度、意地悪くスウイングが変わり、また最初から流れを追つていかなければならなかつた。

どのくらいそうしていただろう。僕は彼女に話し掛けられた事に気付かなかつた。

「ごめん、もう一回言つてくれないかな。」と僕はいつた。

「死ぬつてどういう事だと思う？」と彼女は言つた。

僕は驚いて彼女を見つめた。彼女は真っ直ぐ僕の瞳を見ていた。彼女の瞳は非現実的な程澄んでいた。彼女の瞳を通して、彼女の内面の世界が覗けるような気がするほどだつた。でもそれと同時に、彼女が僕からとても遠くの場所に在るのだという事が分かつた。まるで空の上から見つめられているような気がした。

「さあ、わからないな。僕は死んだことがないからね。」と言つて僕は笑おうとしたが、上手く笑えなかつた。

彼女はまだ僕の瞳を見つめていた。まるで僕の中にある答えを見つけ出そうとするように。

「死ぬつてことがどういう事かは分からぬ。でも死後の世界なら分かるつていうか、想像がつく。」と僕は言つた。

「死後の世界？」と彼女は繰り返した。それは詩の一編のようになにかに響いた。

「そう。死んだ人が行く世界は、この世界と全く同じだと思うんだ。パラレルワールドみたいにね。」

「全く同じなの？」

「いや、一つだけ違う所がある。じゃないと自分が死んだ事が分からぬからね。違う所は一つだけ。」と言つて僕は指を一本立てた。

彼女は僕の指を珍しいものでも見るかのように、見つめていた。
「自分の愛した人がいないんだ。自分が一番いて欲しい人がその世界にはいない。つまり、死んだ人も、残された人もいる世界は同じなんだ。まあ、これは相思相愛の場合だけだけね。」

僕は話が終わつた事を示すためにお酒を飲んだ。

彼女は何かを確認するかのように、ゆっくりと頷いた。僕の言った事について、何か考えているようだつた。

死後の世界。

死んだ人々。

遺された人々。

そういうつた事に思いを馳せていくようだつた。

「君はどう思うの？死ぬつて事。」僕は知りたかった。彼女がその澄んだ瞳で何を見てきたのかを。

「分からぬわ。だつて私は死んだことがないもの。」と言つて彼女は、困つたように小さく笑つた。美しくそれ以上に優い笑顔だつた。まるで今にもきえてしまいそうなほどだつた。

僕は悲しくなった。彼女の笑顔は僕に今まで失ってきた美しいものたちを思い出させた。

やさしい笑顔。

親密な感情。

触れる事の出来る暖かさ。

僕は本当に大事なものを失ってきたのだ。

気が付くと僕は泣いていた。泣いたのはアミがこの世界からいなくなつた時以来だつた。不思議と暖かい涙が頬を伝い流れた。

彼女はゆっくりと手を伸ばし、僕の頬に触れ涙を拭いた。僕は反射的に彼女の手を握り締めていた。彼女の手は暖かかつた。僕はそこに流れている血の事を思つた。

彼女は生きているのだ。

彼女は瞳を閉じ、小さく首を傾げた。まるで僕の手から何かを読み取ろうとしているようだつた。

僕も彼女と同じように目を閉じてみた。まぶたの裏では、光が不可解な模様を刻んでいた。次々に変化する光の図形を眺めていると、心がゆっくりと落ち着きを取り戻した。

僕は彼女の手を離し、

「ごめん。」と言つた。

彼女は気にしないで、という風に首を振つた。

僕は彼女の瞳を覗きこんだ。彼女の瞳からは最初ほど非現実的な透明さは感じられなかつた。代わりに、親密な輝きが浮かんでいるような気がした。

手に触れたからだろうか。

流れる血を感じたからだろうか。

初めてより彼女を近くに感じることが出来た。

彼女は僕に何かを言おうとしているように見えた。でも少し迷つた後、文庫本に目を落とした。

僕は音楽を聞きながら、外を降る雨について考えていた。

僕らの間に、優しく、穏やかな沈黙が戻ってきた。

しばらぐの間をうしていと、翔子さんが戻ってきて

「『めんね。すつかり邪魔しちやつたわね。』と言つた。

亜季は母の帰りを待ち侘びていた子供のよつこ、翔子さんの顔を見上げた。翔子さんは子供にするよつこ、亜季の頭をぽんぽんと撫でて

「この娘、全然喋らないからつまらなかつたでしょ。」と言つた。

「いえ。」と僕は言つた。

「全然そんな事ないですよ。僕は十分……」
樂しかつたです、と言おうとして辞めた。彼女と一緒に居る時、僕が感じていたのはそんな事じゃなかつた。僕が感じていたのは懐かしさに良く似た気持ちだつた。昔良く聞いていた音楽を聞き直すと当時の事を思い出すかのよつな、奇妙な感覚だつた。でも僕はそんな感覚を言葉にすることが出来ず、

「ええと、とにかくつまらなくなつたです。」としか言えなかつた。

「ふむ。」と翔子さんは言つて、こつこつと笑つた。あなたの言いたい事は分かるわ

といつ風な微笑だつた。

「私達はもう帰るけど、あんたたち、これから女の子を引っ掛けよつとしたつて無駄だからね。」と翔子さんが言つた。

「どうしてですか。」

「だつて、私、草薙君ともう一回付き合つ事にしたから。」

「えつ。」と僕は驚いて草薙さんを見た。草薙さんはいつもと同じように、クールに首をすぼめて見せたが、顔は完全に引きつっていた。

「そうにつことだかひ。」と翔子さんは言つて店を出た。亜季は店を出る時、亜季は僕に向かつて小さくお辞儀をした。

さよなら、また会おうも言えず、僕も同じ様に小さく頭を下げた。彼女達が店を出でていつてしまつと、店の雰囲気がガラつと変わつてしまつたよつな気がした。

「参ったな。」と草薙さんが近づいてきて言った。

「そうですね。」と言つて僕は頷いた。

「で、これからどうする？俺は場所を変えて飲むことにするぜ。」

全然飲んだ気がしないからな。」

「僕は遠慮しどきます。何だかそんな気分じゃなくなつたんで。」

草薙さんは僕の顔を覗き込んで

「ああ、やつぱりな。」と言つた。

「やつぱり？」と僕は聞き返した。

「翔子のせいだよ。」

「翔子さんがどうかしたんですか？」やつぱり訳がわからなかつ

た。

「翔子さんは他人のエネルギーを吸い取つてしまつんだ。本人は全く気付いてないみたいだがな。」

僕は草薙さんがそんな馬鹿らしい事を言うとは思つていなかつたので、笑つてしまつた。草薙さんは笑わなかつた。

「じゃあ、なんで草薙さんは大丈夫なんですか？長い間喋つてたじゃないですか。」

「俺は免疫が出来てるからな。効かないんだ。」

「そうですか。」と僕は納得した降りをして言つた。

僕が自分の分の代金を払おうとすると、草薙さんが

「俺が払つてやるよ。」と言つた。

「送つていけないんだ、せめて奢らせろよな。」と言つて笑つた。

僕は礼を言つて店を出た。

外ではまだ雨が降つていた。外を歩く人々は皆例外なく傘を差していた。僕はその顔のない人々の間を縫う様にして、駅まで行つた。雨が僕の服を濡らし、僕の体を重くしていった。

僕は亞季に言つた事について考えていた。

死後の世界。

最も愛する人のいないパラレルワールド。

もし、そんな世界がこの空の上にあるなら、アミは色とりどりの

魂の中、僕の灰色の魂を見つけることが出来るだらうか。
駅に着き、ベンチに座つていると駅員さんがやつて来てタオルを
くれた。

「余つてんだ、持つてけよ。」と彼は言った。

「ありがと。」

「えつ。」彼は聞き返した。

「ありがとうございました。」僕はさつきより大きな声で言つた。

電車は思ったより空いていた。僕の向かい側の席に若い男女がいて、楽しそうにお喋りをしていた。まるで一人にしか分からない言語で、一人にしか分からぬ話題を楽しんでいたようだつた。

駅で傘を買おうとしたが辞めた。ここまで濡れていいたらもう同じだと思ったからだ。

家に着くと、シャワーを浴びて少し眠つた。その後、いつもの日曜日にしてることをした。忙しくて読めなかつた本を読み、大学での講義をまとめ、部屋の掃除をした。雨に濡れて、少し疲れていたせいかいつもより早く眠つた。

その夜、アミから電話はかかつてこなかつた。

(後書き)

読んでくださってありがとうございました。
感想を聞けたら嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6334f/>

雨降りの日曜日

2010年11月11日22時24分発行